

中国東北部における 日抛時期の日本語雑誌の言説空間

文学創作を中心として

劉春英

✉ liuchunying2005@aliyun.com

In the first half of the last century, the Japanese imperialist nibbled away at Chinese territory in the northeast and finally occupied the entire region. Along with the Japanese colonial government's political, economic and military penetration, hundreds of Japanese journals were produced as a result of strict control over Chinese culture and along with an influx of Japanese immigrants. These journals emerged during the expansionist periods of Japanese imperialism, reflecting, in a sense, some respects of the country's policy regarding cultural control and its people's colonial character.

Keywords Discourse space(言説空間), Colonialism(植民主義), Japanese Immigration(日本人移民), Literature journal(文芸雑誌)

19世紀末ごろから20世紀初頭にかけて、日本帝国主義が甲午戦争(日清戦争)と日露戦争を起こした。その後、資源を略奪するために日本人移民が中国東北地方に渡った。1931年、日本帝国主義が「九・一八事変」(満州事変)を起こして、武力で中国東北部を占領した。1945年敗戦まで、中国東北部に移住した150万あまりの日本人移民が286種類の日本語雑誌を刊行した¹。中には、日本人移民によって創作された小説と詩歌などを掲載する日本語文学雑誌と総合雑誌の文芸欄が数十種類あった。これらの植民主義発言権を握った日本語雑誌は、日本植民主義拡張期における「満洲」を舞台とした日本人の生活状況と虚妄の内心世界を描き、その言説の空間は植民主義意識の表れである。

一、言説空間の生成と展開

中国近現代文学の性質は、当時の中国の歴史状況によって左右され、決められている。つまり、1840年アヘン戦争が勃発以来、中国が欧米の帝国主義列強によって分割され、次第に半封建半植民地社会になってきた。それとともに、文学もこの半封建半植民地社会の様相を呈しているのはいうまでもないことである。このような考え方は、中国社会全体の発展状況から見れば、合理性があるが、東北部の社会史とその文学の様相に対して、微視的見地から言えば、日本占領時代の文学を深く掘り下げるのに支障をきたすと思われる。ここで、特に指摘したいのは、二つの問題がまだはっきりしていないことである。

中国のほかの地域とくらべると、1931年以後の中国東北部は、台湾と同じように、その全域が日本帝国主義によって占領されて、完全な植民地になっていた。植民地と半植民地との間にある違った性質にたいして、注目を払った学者は多くないようである。いままでの中国近現代文学史では、半封建半植民地の社会性を強調した上で、反帝国主義と反封建主義を核心とする新民主主義的文学理論を作り出してきた。しかし、このような文学理論をもって、日本占領下の中国東北部の文学活動を考察したら、誤った認識に至ることが多いである。また、「偽満州国地域」の文学を排除すれば、中国現代文学研究の空間の拡大を妨げることになる。

もう一つは、先駆けの研究者たちがすでに、中国東北部の文学史、日本占領時代の歴史と文化遺跡を細部まで考察している。特に、中国にある中国語の資料については、更に掘り下げる余地がないようである。鮮明な地域的文化の特色を持った中国東北部の文学は、「五四運動」の精神の粋を東北全域に広め、封建主義による支配の下で苦しい生活を強いられた国民の苦痛を語り、さらに、ナショナリズムを高揚させていった。しかし、残念なことに、日本占領期における中国東北部の中国文学者についての研究が推し進められている反面、かつて活躍していた日本語雑誌及び日本文学者の存在が無視

¹ 平猷民「日本作家筆下の東北亜」(『日本研究』第4号, 1994.4), p.72.

されている。これらの日本語雑誌の創刊は、日本によって起こされた戦争と無関係ではない。1931年の「九・一八事変」の勃発から1945年の日本敗戦にかけて、「陥落」(日本軍の軍事侵略によって燃えあがった民族意識)意識の勃興とともに盛んになった中国文学者の文学創作活動が、日本占領期における東北文学の研究の主体であるというのは、広く認められた事実である。しかし、文学が戦争に直面したという背景を考えると、この認識は文学批評の原理と歴史の真実に合わないと思われる。学術研究の方向付けの前提として、日本占領期における中国東北部文壇の外来勢力に着目するのは、「満州国」の独立そのものを承認するわけではなく、この方向付けによって、新しい角度から、戦争がもたらした植民主義文化を再び解釈しようとするためである。言い換えれば、日本帝国主義、軍国主義の侵略行為により成立した傀儡政権としての「満州国」の性質と実態を深く掘り下げるためである。植民の歴史とは、植民主義の宗主国の文化、そして「植民主義の対象」である圧迫を受けた先住民の文化、この二つの文化の軋轢の歴史である。

文学は人間学である。日本によって支配された中国東北部の十四年の歴史を振り返れば、支配民族の一員としての数百にのぼった数多くの日本文学者は、母国語で、自分なりの経験に基づき、文学創作の体系の下で、「満洲」の文壇において、発言をしていた。この文学創作は、20世紀の中国東北部における特定の植民地文学現象を表している。植民地文学の特色の一つは、さまざまな民族と言語が交じり合い、要素として、多次元文化を成立させることである。したがって、植民地文学を研究するには、宗主国からの影響を無視するわけにはいかないと思う。しかし、残念なことに、日本文学者による中国東北部での文学創作は長い間見過ごされてきた。そのために、わたしたち文学史研究者は、上述した研究に支障をきたす妥当性にかけて戦争文化観の束縛から抜け出して、多元的な中国現代文学史の全貌を究明すべきだと思う。幸いなことに、韓国高麗大学によって切り開かれた東アジア研究の領域は、植民地文学研究の空白を埋めている。

二、言説空間の歴史的範囲

次は、日本が中国東北部を侵略する期間の問題である。今まで、中国の歴史文献では、「陥落十四年」という言い方が使われている。実際は、日本は中国に対する侵略の意図が、1894年、甲午戦争が勃発した時、すでに表面化してきた。10年後、日露戦争が勃発、日本は中国の主権を無視して、東部の南部の遼東半島で帝政ロシアと戦っていた。これは、日本帝国主義が中国東北部全域を侵略するための演習だといえる。その後、南満洲鉄道を守るのを口実に、日本の民間団体と移民が政府からの支持と支援を得て、次第に東北部に移住してきた。1931年「九・一八」事変が勃発するまで、東北部に移住した日本人はすでに数十万に達していた。1894年から1931年まで、中国東北部で刊行された日本語の文学雑誌と日本語の文学作品は「日抛時期」の日本語文学雑誌の範囲に

入れるべきだと思う。なぜかというと、日本軍国主義の侵略とともに、中国東北文壇に入って来たものだから。これは「中国東北部における日抛時期の日本語雑誌の言説空間」の上限期間についての考えである。その認識に基づいて、「陥落」ではなく、「日抛」、つまり「日本占領」という概念を使うことになった。この時代は20世紀前半期にわたっている。

本稿では、「日抛時期」という用語を使ったのは日本の中国東北侵略時期について検討すべきところが多いと思うからである。長い間、中国国内文献では「陥落十四年」という用語を使っているが、実は日本は1878年にすでに朝鮮半島と中国東北を侵略するプランを立てた。

このようにして計算すると日本人の東北地域での活動時間はさらに50年も遡ることができると思う。なかには甲午戦争と日露戦争も含める。時代の現象として日系移民の文学活動はある側面から日本帝国主義政権の移民政策や政治傾向を如実に反映している。言い換えれば、日本帝国の近代東アジア政策および日本帝国主義の発展史を示しているのである。おおくの学者は論文では歴史の表面現象だけ語ったがその長い歴史の形成過程は見落とされた。これは、私の「中国東北部における日抛時期の日本語雑誌の言説空間」の始点と終点についての一つの考えである。

日本植民主義政権は中国東北部で半世紀あまりにわたった植民支配を行っていた。その間に、数十種にのぼった日本語文学雑誌は「満洲」に移住した日本人作家によって創刊された。数多くの詩歌・小説・随筆・劇作を載せたこれらの文芸雑誌は、特定の歴史時代における日本人の生活の鏡として、日本近代文学史において重要な地位を占めることとなった。しかしながら、それらの日本語文学雑誌は、歴史の流れの中で、わたしたちの視野からしだいに離れていった。本稿は日本語文学雑誌を考察し、さらに「満洲」の歴史的・文化的な産物を掘り起し、日本植民主義の拡張期における日本民衆のもった植民地心理を描いた雑誌の全貌を明らかにしようと思うのである。

三、言説の目的と問題意識

史料によると、1872年に日本人がすでに遼寧省の營口に住んでいた。この日本人移住者の増加は戦前と戦時中における中国東北部の文化の畸形的な発展を大いに促した。とくに日本が中国東北部を支配する十四年間においては、数百名にのぼった日本人作家が様々な理由で「満洲」に渡って、数百種類の雑誌と新聞を創刊し、そこで活発な文学創作活動を展開していた。しかしながら、今日でも、日本の文学研究者は「満洲」に渡った経験のある作家の創作活動の全貌を、まだ把握できていない。例えば、戦後の文壇で活躍した戦後派作家の壇一雄、長谷川四郎などが「満洲」にいた時に書いた作品は、戦後に出版されたかれらの全集に収録されていないのである。「満洲」で亡くなった荒川義英・田中稔・木崎龍・葉山嘉樹・佐藤大四郎・逸見猶吉などの作品も同じ運命をたどってい

る。有名な通訳者——大内隆雄は1916年に長春市へ来て、たくさんの「満洲」文学雑誌の創刊活動に参加して、1945年まで、合計110種類余りの中国人作家の文学作品を翻訳して、文庫本或は雑誌連載の形で発表した。「芸文」雑誌に連載した「満洲文学二十年」は、大内隆雄の代表作で、現在までに見つけられた「満洲」文学史研究の著作においても、最高の傑作と言っても過言ではない。しかし、彼の名前は日本の多くの近現代作家辞典に収録されていない。

大まかに推計すると、日本人作家が「満洲」で作った文学作品の大部分は整理されないままに、中国東北部の百余りの図書館と民間に散在し、次第に歴史の埃の中に埋もれつつあるということがわかった。

四、「大連時代」——自由主義の言説空間

日本人の「満洲」における文化活動に触れると、まず日本帝国主義のことを必ず言及しなければならない。日本人はいつ中国東北部にやってきたのか、まだ明らかにならないことであるが、現在までに見つけられた資料によると、1872年、日本人はすでに中国東北部にやってきた²。その後、ロシア人による中東鉄道の建設とともに、たくさんの日本人商人・労働者・遊女がお金を稼ぐためにそこに渡ってきていた。

1904年、日露戦争が勃発した時、森鷗外をはじめ、従軍した日本の文化人は「満洲」に来たが、それは日本文化が「満洲」へ正式に入ってきたことを示している。19世紀末と20世初頭になると、数多くの日本の商人は「満洲」南部にある大連とその周辺地区に次々と進出してきた。それら「満洲」に進出してきた日本人商人は、日本帝国主義の先鞭として、植民地社会において、柱石のような役割を果たした。

1905年には日本人が大連から長春市までの鉄道の沿線の租借地の経営を始め、1906年には満鉄を設立し、同年の10月25日、末永純一郎が大連で「遼東日報」という日刊を創刊し、当地の日本人の勢力の発展を促進した³。大連は「満蒙」の物資集散地・満鉄本線の始発駅・中国東北部の中心地として発展していた。大連では、1910年には、移住した日本人が61,934人に達し、総人口の11.9%を占め、1929年には、103,002人まで増えて、全市人口の16.6%を占める⁴。1940年には、177,412人まで増えて、全市人口の29.34%を占める⁵。中国東北全土においては、日本人移民の人数のもっとも多い都市になった。大連に隣接した旅順市では、日本人と中国人の人口比率は2対3ほどになった。1935年に出版された「最新大連市案内」の「伸びていく大大連」という部分では、大連をロスアンゼルスに匹敵する「文化都市」に建設するプランが披露された。その背景において、さまざまな

2 李相哲『満洲における日本人経営新聞の歴史』(凱風社, 2000), p.30.

3 蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』(東京名著普及会, 1980), p.278.

4 大形孝平『日本の満洲開発』(満洲文化協会, 1932), p.3.

5 真鍋五郎『満洲都市案内』(亜細亜出版協会, 1941), p.166.

夢を持った日本人が「満洲」にやってきた。

日露戦争以後、日本は奉天や長春など、これら大都市の付属地に日本人街を形成した。「満洲」植民地化の尖兵として、南満洲鉄道の営業が開始されるや、その関係筋の役人や経済人のみならず、にわか文化人の往来が激しくなる。作家の中にも、満鉄やのちの協和会の斡旋による視察旅行が多く見られる⁶。1907年に渡満した二葉亭四迷をはじめ、1909年から、夏目漱石・与謝野晶子夫婦・横光利一・里見淳・徳永直・室生犀星・島木健作などの文学者が相次いで視察旅行のために「満洲」に渡った。加えて、満鉄の従業員出身の作家も文壇に登場した。これらの日本人移民と文化人が持った植民主義としての「宗主国」の文化意識が「満洲」の伝統的固有文化との間の激しい衝突の起因となった。

1906年から「満洲事変」直前の1926年1月まで、日本の勢力が中国東北部の北部に進出するにつれて、日本人が続々と大連・營口・丹東・瀋陽・遼陽・鉄嶺・開原・四平・長春・ハルビン・ジャムスなどの鉄道沿線にある都市で百種にのぼった新聞を創刊した。それに対して、1908年2月18日、相沢仁郎が主幹編集(編集長)を担当した「大連実業雑誌」は、「満洲」における最初の雑誌として、大連実業会によって発行された。1912年になると、撫順・遼陽でも、12種の日本語雑誌が誕生した。その内訳は、宗教と関わりを持った雑誌が5種類で、商業・旅行・婦人と子供の生活に関係を持った雑誌が7種類である。

大正時代に至ると、満洲に渡った日本人が急に増えてきた。それに伴って、雑誌の創刊と発行も繁盛期に入ってきた。統計によると、当時、公に発行された雑誌はすでに286種類にのぼった。特に大連で発行された雑誌が多くて、代表的なのは「読書会雑誌」・「満洲運動界」・「満蒙の文化」・「家庭タイムス」・「やまと一子」・「満洲女性界」・「新天地」・「満洲建築協会雑誌」・「合掌」・「満洲評論」・「満蒙評論」・「満洲改造」・「満鮮」・「新満洲」・「大陸之文化」・「大陸生活」などがあげられる。それと比べれば、公に刊行されない同人雑誌の数はその数倍になり、文学雑誌がもっとも多い。

発行の量から見れば、公に刊行された文学雑誌はトップとは言えない。それに対して、手写本の同人雑誌は量が多かったが、今日まで残されたのが稀である。雑誌の発展の歴史は「満洲」の文芸運動史と日本の文芸発展史にかかわって密接な関係を持っていた⁷。時代区分すれば、雑誌の発展の歴史は三つの時期に分けられる。つまり、1905年から1920年までの前期、1921年から1937年までの中期、1937年から1945年までの後期である。地域から見れば、二つの時期に分けられる。つまり、大連を中心地とした前期と新京を中心地とした後期である。文学のジャンルからみれば、優れた詩歌と俳句がたくさん出てきた前期と小説がたくさん出てきた後期に分けられる。

どのような分類方法でも、前期の文学雑誌の多くが大連で刊行されたことが認められる。いい文学創作の環境に恵まれて、満鉄と関係を持った作者も少なくなかったし、

6 葉山英之『「満洲文学論」断章』(三交社、2011)、p.28.

7 大内隆雄『満洲文学二十年』(国民画報社、1944)、p.18.

前期の作品の方が自由主義の色を帯びている。新京の政客や御用文人が建国精神を唱えたのに対して、大連の文学者は庶民意識を持っていた。日本は1905年に大連を占領し、1937年に中国東北部全土を手中にした。日本人によって創られた「満洲文化」もそのようなルートをたどっていた。

上述した歴史を踏まえて、大連と長春を例として満洲の日本文学雑誌の発展の歴史を顧みたい。

日露戦争後、文学は萌芽時期にあった。最初誕生したのは川柳、短歌、俳句、漢詩などの作品であった。1910年前後には、俳句誌「アカシヤ」が創刊され、1913年には漢詩・短歌・俳句などを掲載する川柳雑誌「連」などが創刊されて、1914年には、短歌雑誌『かはせみ』が出版されて、1920年には『夕日』が西創生によって創刊された。『平原』は俳句を中心に発行される雑誌である。『関東州俳句協会綱領』、『日本俳句作家協会綱領』など正式な規約も作られた。

当時、大連の文学愛好者はまだ大きな固定の文芸団体を持っていなかった。有名な満洲文学評論家である大内隆雄の考察によると、当時の作品の多くは日常生活の表れとして、封建主義的意識を持っていたと言われている。それらの「満洲文化」の創始者は次第に歴史の舞台から退陣していったのである⁸。

1920年代、俳人である安藤十歩老と梅野米城は俳句の新しい創作理念と方法を大連に持って来て、旧い思想を持った「アカシヤ」を更新した。そして、1920年「アカシヤ」と「黒煉瓦」は合併した⁹。二十年代末期から三十年代初期まで、『平原』(1929)は関東州俳句協会によって刊行され、『満洲』(1931)は満洲俳句協会によって刊行され、『柳絮叢書』なども刊行された。それらの俳句雑誌は多くの俳人作家を育ててきた。

1920年、大島濤明のリードした「娘娘廟」が生まれ、川柳の新しい陣地になった。1926年には大連の句帳舎が「通」を創刊し、1927年には大連の新川柳社が満洲川柳大会を開き、「満洲」(1927年)という月刊柳誌を創刊し、その後、「青泥」、「白豚豕」なども創刊された¹⁰。

1920年代は新型詩が素早く発展し、西呉凌の「暁」(1921年)・横沢弘などの「曠野」・新木秀郎と司馬太などの「あゆみ」などの詩歌雑誌が出てきた。そして、1924年から1927年にかけて、「亜」が創刊され、安西冬衛、北川冬彦、瀧口武士等の詩人も文壇にデビューした¹¹。その後、高橋順四郎は「燕人街」という雑誌を刊行した¹²。『燕人街』の創刊号が1930年10月に大連で刊行された。編集者は高橋貞四郎、発行者は橋本八五郎。詩をはじめ、短歌、評価、エッセイ、民話などさまざまなジャンル形式の文芸が掲載された。

1928年には、西田猪之輔等が満洲短歌会を創設し、「合萌」を創刊した。執筆者は西田

8 大内隆雄『満洲文学二十年』(国民画報社、1944)、p.18。

9 大内隆雄『満洲文学二十年』(国民画報社、1944)、p.19。

10 大内隆雄『満洲文学二十年』(国民画報社、1944)、p.19。

11 大内隆雄『満洲文学二十年』(国民画報社、1944)、p.19。

12 大内隆雄『満洲文学二十年』(国民画報社、1944)、p.19。

猪之、池淵鈴江などである。1929年には、八木沼丈夫や城所英一などが「満洲短歌」を創刊し、富田充や青木実もその雑誌の同人である¹³。その他に、戎克発行所によって刊行された「戎克」(1929年)や満洲郷土協会によって発行された「満洲短歌」(1930年)なども有名な雑誌である。

1931年、「九・一八事変」が勃発した後、「満洲」文化の中心地が大連から新京に移ってきた。それに伴って、大連の詩歌・俳句類の文学雑誌の出版は次第に衰えてきた。

上述したように、大連の雑誌は「満洲」における日本文学(日本語版)雑誌のさきがけと言える。大連の雑誌という舞台の上で、詩歌、俳句、川柳などの優れた作品がたくさん出てきた。その中に、早期の植民主義拡張期における日本民衆の虚妄の理念を体現した作品も少なくなかった。

1931年に起きた「九・一八事変」(満州事変)によって、「満洲」における日本左翼が打撃を受け、そして、日本文壇も一気に低迷に陥った。「満洲」全土を占領した後、日本帝国主義は「満洲国」をでっちあげ、「日滿一徳一心」や「王道楽土」や「五族協和」というスローガンを掲げ、植民支配を始めた。その背景の下で、「満洲」における日本文学は植民地当局に支持され、発展を遂げた。1932年3月、「満洲文芸年誌」は大連で出版され、詩や論文や新興川柳を収録した。そして、1932年10月、文学雑誌である「作文」は青木実、竹内正一、城小碓、落合郁郎、島崎恭二、町原幸二、安達義信などによって創刊され、1942年まで続いた。

「九・一八事変」が勃発するまで、大連はずっと満洲文学の中心地としての地位を占めていた。大連文壇は短期間で存在したさまざまな詩歌雑誌に頼らず、「作文」という頑丈な陣地があればこそ、活気を長期間に保つことができた。「作文」雑誌及び作文派の作家たちは「満洲文学」において重要な地位を占めていた。遺憾なことに、「作文」は合計55期出版されたが、今残されたのはただの23期分しかない。その中の大部分が民間に散在して、普通の研究者がそれを読むことができないことになった。

1937年7月7日、日本帝国主義は全面的に中国を侵略し始め、かつてない戦争の災難を中国人にもたらした。同年の夏、有名な満洲文話会が文学基礎の強かった大連で設立された。同年の7月15日、満洲文話会の機関誌——「満洲文話会通信」は創刊されて、1941年5月15日まで続いて、合計45期発行された。

1938年1月まで吉野治夫等大連の作家は新京、奉天、ハルビン、吉林、旅順等各地の作家とその文話会に参加した。彼らは満洲文学者を集めるために、1937年から1939年まで、大連・瀋陽・新京で「満洲文学年鑑」三編を編集した。

「満洲」の日本語雑誌は大連で端を発したが、1930年代に、日本人移民が北へ移住するとともに、衰退期に入ってきた。満洲俳句会によって発行された『満洲』(1931)、大連俳句会によって刊行された「満洲通信俳句」(1939年)と「鶉」(1941年)、満洲俳句会によって刊行された「俳句満洲」(1942年)、松田優人と瀧口武士が同人として創刊した「カササギ」

¹³ 大内隆雄『満洲文学二十年』(国民画報社、1944)、p.55.

という詩誌だけがこの時代に新たに刊行されている。しかし、大連で日本文学雑誌が誕生し、詩歌・俳句・川柳など叙情文学において多くの傑作が作られたことは無視できないと思う。詩歌と比べて、小説の創作は発達していないようである。

1930年代、日本植民主義が中国東北部全土を占領した後、日本語雑誌も撫順・瀋陽・長春などの北部の都市まで拡張していった。1932年、「満州国」が樹立された後、首都の「新京」も政治・経済・軍事の中心地となった。このような背景の下で、文化の中心地も「新京」に移ってきた。「満洲」の日本語文学雑誌の発行も植民当局の支持を得て新しい発展段階に入った。小説は文壇のジャンルの主流になった。『作文』という雑誌が誕生した前後、総合的な小規模の文学雑誌も一時的に活躍した。1930年には『移民文学』・『燕人街』・『赭土文学』・『大陸文学』・『曙人』、1931年には『胡同』・『街』などの文学雑誌が登場した。それとともに、青木実・古川賢一郎・大内隆雄などの文学者もデビューした。これらの雑誌はいずれも寿命が短い。

五、「満洲浪漫」時代——多元化の浪漫主義の言説空間

日露戦争後、日本人移民が中国東北部の中部都市である長春市に入ってきた。1906年、日本人が長春寛城子駅近くの租借地で駅・旅館・商業会社などの施設を建て始めた。その後、移民が次第に増えてきた。1920年代から、早期の移民の生活を反映した総合文学刊行物が世に問われた。執筆者の多くは満鉄会社の若手社員と家族である。1932年3月1日、満洲植民主義傀儡政権が樹立されて、長春市も「新京」と名を改めた。植民主義政権の政治の中心地が「新京」に移った後、文化の中心地もそこに移った。1938年「満洲浪漫」が創刊されるまで、文壇の多元化で自由主義と浪漫主義の創作も活躍する空間があった。現在、発刊を確認できる文学刊行物は次の通りである。

① 小倉吉利と山本留蔵及び「黎明」

活気に溢れた大連文壇と反対に長春市における日本文化の発展のスピードはおそかったのであるが、小説の創作活動が割合に盛んだった。文芸同人の総合的な雑誌——「黎明」は長春市において最初の総合的な文学雑誌として、1922年に創刊され、二年後停刊された。初期のはざら紙に謄写版で刷って綴り合わせ、それにこんにやく版で刷った表紙をつけた、そんな体裁のものである。この雑誌は主に小説と評論を掲載する。例えば第三卷第三号に有島武郎の脚本「ドモ又の死」について大内隆雄が書いた評論が載った。この雑誌の核心的な人物は「堀川艶之助」をペンネームにした豊高亘である。「黎明」という雑誌の歴史を考察するならば、小倉吉利と山本留蔵を言及しなければならない。二人は良好な待遇を受けた満鉄の下級青年社員であった。この雑誌の同人は主に満鉄や満洲王社員や長春商業学校の生徒で、同人団体は満鉄という職場を基盤として次第拡大し、

会費は給料から差し引かれる規定であった。総領事館から正式の許可をもらってはじめて、活字印刷と発行を始めるということであった。

② 大内隆雄と「我らが文学」

1925年には、大内隆雄が主宰した謄写版の私家版的な規模の小さい雑誌である「我らが文学」が創刊された。主な執筆者は大内隆雄・柿沼実・浅利勝など長春商業学校在学中の満鉄関係者の子弟たちである。大内隆雄は18年後に、「芸文」雑誌の前書きにおいて、「満洲を代表する文学雑誌があってもよいと思う。——その希望する雑誌が出現した時に、地方の特色としては、謂ふ所の植民地情調気分気質もあり、郷愁者の美しい詩句もあろうか、それらを超えて時代は、世界主義精神の実現、民族と民族との触れ合い——その表現を要求している。我らの小さな力が、何を為し得るものとも思わぬが、その必要な芽生の為に、肥料としての役目の一部分を果たし得るならば幸甚とする所である」と、当時のことを述べた¹⁴。「我らが文学」は創刊の後、「ドンキイ」と名を改められ、六月号から活字印刷と変わり、短編小説・詩歌・劇作・新体詩・雑文・評論などを載せる雑誌になった。

「満洲」に住んだことのある日本人作家は数百名にのぼり、その中で、生活の時間の最も長いのが大内隆雄である。彼は16歳の時、長春市へきて、二年後、「長春実業新聞」が主催した短編小説賞二等賞を受賞し、翌年も「感情の微塵」で新聞の一等賞を受賞した。その時から、「満洲」の各種類の新聞と雑誌に数多くの小説と評論文章を発表して、「支那研究論稿」・「一つの時代」・「東亜新文化の構想」・「満洲文学二十年」などがその代表作である。その中で、「満洲文学二十年」は社会価値が非常に高い著作で、今見つけられる最も重要な「満洲」文学研究資料である。作者は豊富な史料と自分の経験に基づいて、1923年から1942年までの「満洲」文壇の状況を描いた。

「満洲」に住んだ20余年には、数多くの小説と評論の他に、大内隆雄が上手な中国語を駆使して、百冊余の中国文学評論著作を訳して出版して、当時の「満洲」文壇におけるすべての有名な中国人作家の代表作をだいたい日本人の読者に紹介した。1925年には、大内隆雄がすでに創造社の作家の張資平の小説——「植樹節」と「密約」及び郭沫若の「落葉」の一部分を翻訳して、「長春実業新聞」と「満蒙」(雑誌)に発表した。1930年代の後期には、「満洲」に渡った日本人が急に増えてきて、中国東北部の中国人作家も活躍してきた。その背景の下で、1939年、大内隆雄は文壇にすでに名を知られた9人の中国人作家の12篇の作品を訳して、「満人作家小説集第一編」——「原野」を編集して出版した。この翻訳作品集は「満洲」だけではなく、日本でも注目されて、日本人の「満洲」社会情勢の理解に積極的な役割を果たした。日本文化延長線としての「満洲」で活躍した大内隆雄は翻訳をもって、植民主義文化を背景とした「満洲」作家の「満洲観」を日本国内の読者に伝え

¹⁴ 大内隆雄『満洲文学二十年』(国民画報社、1944)、p.55.

た。それと同時に、この翻訳作品集が古丁などの親日派の「芸文誌派」の作家の作品を多く選んだと中国人に批判された。1940年には、大内隆雄が「満人作家小説集第二編」——「蒲公英」を編集して出版し、同じく文壇で有名な9人の中国人作家の12篇の作品を収録した。この12篇の作品は、故郷を離れた白系ロシア人の郷愁を描いた「雁南飛」を除けば、すべての作品が下層社会の貧民の悲惨な人生及び恨みと頹廢の社会世相を描写した。1944年には、大内隆雄と中国人女性作家の吳瑛が共同で「現代満洲女流作家短編選集」を編集して(大内隆雄は翻訳と出版の活動を担当した)、7人の有名な女流作家の11篇の作品をそれに収録した。この作品集に収録されたのはだいたい社会下層でもがいていた女性たちが如何に封建的家父長制度に反対するのか、如何に理想的な婚姻と愛情を求めのか描いた作品である。それらの作品を通じて、日本人の読者は「満洲」文壇で活躍した中国の若い女流作家の芸術的成果及び彼女たちの手によって描かれた封建主義と植民主義の圧迫を受けた女性の悲しい運命を多かれ少なかれ読み取った。また、「満洲国」時代における中国女性文学の「日本存在」を理解した。「日本存在」はすなわち、植民主義支配の下で、女性の声、女性の植民地文化に対する反発と受容である。

③ 奥一と「高粱」

1931年、日本軍が「九・一八」事変を起こし、中国東北部を占領した。その後、一部の雑誌と大学と高等学校の雑誌も停刊され、他の地方からの中国語雑誌も自由に輸入できなくなった¹⁵。その代わりに、日本語雑誌は繁栄を迎えた。

1932年9月、「高粱」は主編者の奥一の手によって新京に出版され、1933年の刊行一周年の時に停刊した。当時は、北に「高粱」あり、南に「作文」と言われたほどである。そこから、当時の満洲文学の様子及び「高粱」の地位を少しでも窺えるだろう。「高粱」の執筆者は佐和山一郎や青木実などが挙げられる。作家たちは高粱社(「高粱」雑誌編集社)を基礎として、「満洲文芸家協会」を結成して、「満洲」における中日文学の翻訳活動を推し進めようと努力した。残念なことに、今は、日本にしても、中国にしても、「高粱」雑誌が一冊も見つけられていない。

「九・一八事変」の最初の幾年は文壇が雑然とした状態を続けていた。新京には「高粱」の外に、「満洲文学」や「モダン満洲」があった。その外に、「満洲文学」の作品は「満洲日々新聞」・「奉天日々新聞」・「新京日々新聞」・「ハルビン日々新聞」・「康德新聞」・「満蒙」・「満洲評論」・「新天地」等に掲載されている。それらの総合刊行物の版面がなかったら、満洲文学の発展はなかっただろう。

15 劉玉璋「日本雑誌与満洲雑誌」(『書光』第2号, 1942.2), p.80.

④ 北村謙次郎と「満洲浪漫」

「新京」においては、1932年から、すでに多くの日本語版の新聞が発行され、「満洲新聞」・「満通社」などの新聞社が活躍し始めていた。「新京」・「満洲文芸」などの総合的な文芸雑誌も次々と創刊されたが、経費や編集者が足りないなどの問題で、間もなく廃刊された。「満洲浪漫」の創刊はやっと「新京」文壇の状態を徹底的に変えた。

1938年には「新京」で北村謙次郎、長谷川浚、木崎龍、逸見猶吉、大内隆雄、吉野治夫等が主な成員として「満洲浪漫」という雑誌を出版した。それは「満洲」における日本文学の中心が「新京」に移って、多大な成果を収めた現れである。「満洲浪漫」の大部分の成員は日本にいた時すでに文壇にデビューし、その後、「満洲」に來た作家である。

日本植民政権が中国東北部を支配した十四年間は、「新京」文壇で数多くの日本語雑誌が誕生した。その中で、ナンバーワンと見なされたのは「満洲浪漫」である。

1938年10月2日、北村謙次郎は「満日文化協会」の常務主事杉村勇造から援助を受けて、「満洲浪漫」を成功裏に刊行していた。「満洲浪漫」は総合的な文学雑誌で、雑誌の核心的人物が北村謙次郎である。「満洲浪漫」創刊の意義は大きくて、最大の成果は「満洲」の日本文学を新しい段階まで発展させたことにあった。それは北村謙次郎にとって人生の尤も輝かしい成果である。

「満洲浪漫」の誕生は「新京」を中心とした「満洲」文芸の復興を示し、「新京」の文芸の基礎を築いた。統計によると、1939年年末まで、「満洲」には、286種類の雑誌があったということである。しかし、「満洲浪漫」創刊の前には、「満洲」の本当の文芸雑誌がまだ少なかった。中国人によって創刊されたのは、日本植民政権に表で従った古丁などが「新京」で刊行した「明明」とその後身——「芸文誌」だけであった。左翼作家は植民政権の迫害を受けて、銃殺されたり、関内(中国の山海関より南の地方)に亡命したりして、雑誌を創刊することができなかった。日本人によって創刊された雑誌は、1932年に「新京」で創刊された「高粱」と同年に大連の満鉄の若い社員たちによって創刊された「作文」だけあり、前者は編集主幹の転職によって、創刊後、二年間続いて停刊した。他には、1935年に、奉天(今の遼寧省の瀋陽市)南満医科大学の学生が創刊した文芸雑誌「医科」があった。このいくつかの雑誌は何人かの作家を育てただけで、強勢な文学の流れを創ることができなかった。

「満洲浪漫」は合計7期と4冊の叢書を刊行した。「満洲浪漫」の執筆者は多くて、「満洲文化」を代表した各方面の人士がここに集まった。興味深いのは、日本植民政権と「満洲国」傀儡政権に反対した中国作家の王則と袁犀の作品も「満洲浪漫」に載せられた。満洲浪漫派の同人の中には、北村謙次郎、横田文子、緑川貢、坪井与、壇一雄など日本国内の浪漫派出身の作家がいた。「満洲浪漫」は「日本浪漫」の停刊の二ヵ月後に創刊されたのである。日本の浪漫派は1930年代、プロレタリア文学が弾圧された後誕生した文学流派で、時代への不安及び文明開化という近代化への不信と絶望を持ち、変哲のない文学に反抗し、尊い精神を求めていた。それに対して、満洲浪漫は「満洲大陸」植民政権の下で活躍

した流派で、その核心的な主旨が浪漫主義で「満洲」建国精神を表すことにあった。満洲浪漫派の代表的な作家として、北村謙次郎は日本人が「満洲」の大地に根ざすべきだと主張し、また、日本浪漫派の芸術観をそのまま踏襲せず、「満洲」の生活の奥を探究し、社会の現状を理解すべきだと唱えた。言い換えれば、「満洲浪漫」の「浪漫」を日本による中国への侵略と結び、「対中戦争」を「満洲浪漫」の思想の柱として、「建国精神」を「満洲浪漫」の最高の理想とすべきだと、北村謙次郎は主張した。また、創作方法においては、北村謙次郎が日本浪漫派に軽蔑された写実主義を提唱した。日本浪漫派と区別するために、満洲浪漫派はわざと日本浪漫派の「漫」と発音が同じで書き方の違った「曼」を使った。1941年、資金などの問題で、「満洲浪漫」がついに停刊された。

「満洲浪漫」は1938年に創刊され、「芸文指導綱要」が提出された1941年まで、「満洲」文化集権化への移行期の産物として、当時の文壇に大きな影響を与えた。「満洲浪漫」は「満洲」文化と「満洲」芸文への解明、「大日本帝国」が植民地で実施した政策に対する分析にとって、貴重な歴史資料である。それを通じて、侵略の「国策」がどのように「満洲」の民衆の心に影響したのかも明らかにすることができると思う。

六、「芸文」時代——プロパガンダの言説空間

日露戦争の後、1906年から、数多くの日本人が長春に移住して行った。1907年には、527人、1913年には3000人を超えた。1932年3月15日、日本関東軍は長春市を「満洲国」の首都と定め、「新京」と名を改めた。この年、「新京」の満鉄付属地と商店街の周りに定住した日本人商人は8672世帯、37,533人に達した¹⁶。「満洲国」警察庁の統計では、1938年7月には、「新京」にて定住した日本人は74,421人、市総人口の21.37%を占め¹⁷、1940年には102846人に達した¹⁸。1941年、「満洲国」に定住した日本人は566,471人、「満洲国」総人口の1.9%を占め、そのうち79%は「新京」と周辺の都市に住む。長春市周辺の吉林市・公主嶺・徳恵・九台・農安などの都市に数万人の日本人移民が定住し、日本人街を作った¹⁹。日本人移民の増加と日本文化の輸入に伴って、「新京」の植民文化も栄えてきた。これに応じて、日本語雑誌が大量に誕生し、日本文学研究者もやってきた。

1932年後、「満洲国」の文化の中心地も次第に「新京」に移ってきた。そこで、1939年の夏、満洲文話会も大連から「新京」に引っ越した。1930年代後期から40年代前期には、「新京」において、文学作品が多く出てきた。

1940年7月26日、日本第二回近衛内閣が「基本国策要綱」を定め、「大東亜新秩序の建設」と「国防国家体制の整備」を基本国策とした。様々な組織が創設され、新聞団体機関も改

16 星野龍男『満洲主要都市工商便覧』(大連南鉄道株式会社地方部商業課, 1935), p.67.

17 『新京案内』(1939), p.36.

18 真鍋五郎『満洲都市案内』(亜細亜出版協会, 1941), p.166.

19 『第一満洲国年報』(満洲文化協会, 1933), p.100.

造された。その背景において、1941年1月30日、山田清三郎は文章を発表して、「今の急務といえ、上述した三者(政府・協和会・民間)を一体と結合して、文化国策を定め、それに従い、すべての文化運動と文化建設に対して明確な目標を提出することだ」と主張した。

1941年3月には「満洲国政府」が「満洲国芸文指導要綱」を公布し、政府の名義で満洲文化人に日本帝国主義の対外侵略戦争の「国策」に力を尽くすように要求した。

1941年3月23日、弘報処は「満洲」各地の文話会のメンバーを集めて芸文政策懇談会を開き、「芸文指導要綱」を公布し、満洲文芸の基本方針を定めた。すなわち「芸文が建国精神を基調として、それを以って八紘一宇の精神の美しさを展示し」、いままでの「満洲国」文化政策を根本的に改革することである。つまり、「満洲芸文」の発展の方向を日本の対外戦争への対応と決めた²⁰。三ヵ月後、山田清三郎と大内隆雄及び「満洲国」弘報処処長の武藤富男と数回の相談をして、新しい芸文団体の設立に向けて準備した。

1941年7月27日、武藤富男の「國務院弘報処」の主催の下で、「満洲文芸家協会」が設立された。各地にも分会が設けられ、その規模はかつてないほど大きかった。「満洲芸文通信」という雑誌も機関誌として創刊された。満洲文話会は満洲文芸家協会の成立を以って解散した。その後、文芸、美術、演劇、音楽、写真、工芸、書道等の各協会を含めた「満洲芸文連盟」も創設された。「満洲芸文連盟」は「満洲文話会は文化と関係のある各部門における活動を以って、建国精神の宣伝・民族協和の実践・国民生活の向上・国家政策の徹底的な宣伝・国民動員の遂行に役割を果たし、建国理想の実現と道義の世界の建設を促進する」というスローガンを提出した。

弘報処の武藤富男などにしてみれば、かつての左翼転向作家の山田清三郎が優れた文芸運動指導の能力を持ち、そして、信頼できるので、彼を「満洲文芸家協会」の委員長に任命した。その前には、山田清三郎がすでに植民主義政権の支持を表明して、就任後、植民政権の指示に従い、国策の貫徹を任務としていた。1942年、山田清三郎が著作した「康徳9年度の満洲文学界」によると、満洲文芸家協会のやった11の事業の中の九つが「愛国大会」、「聖戦」、「関東軍報道部」、「興亜」、「開拓地の視察」、「大東亜文学者大会」などの活動とかかわりを持っていた²¹。

1941年12月8日、太平洋戦争が勃発した。それと同時に、満洲芸文も動員され、作家たちは北方国境(ソ満国境)や各戦地へ派遣された。

戦時体制の下で、統制の厳酷さと紙の不足によって、満洲で盛んだった中国語と日本語の雑誌の多くは停刊され、或いは版面が削減された。文芸家協会の作家たちは自分の作品を発表するところを求めるようになった。山田清三郎の提議によって、1942年1月、満洲文芸春秋社は「芸文」を協会の機関紙として創刊した。それを以って「芸文通信」に取り替えられた。1944年1月1日、『芸文』は「満洲芸文連盟」の機関誌として第二回目の

20 岡田英樹「文学にみる『満洲国』の位相」(研文出版社、2007)、p.31.

21 日本報国文学会『昭和年鑑十八年文藝』(桃溪書房、1943)、p.19.

発刊となった。雑誌は「政府の特別な支持を得て」、「文芸報国」というスローガンを掲げた。作者はほとんど日本人だが、中国人の爵青、田瑯なども発表することがあった。

「芸文」雑誌の出版は前期と後期に分けられる。前期は1942年1月から1943年12月までで、新京西七馬路十四号にある芸文社によって出版され、発行人は小原克巳、編集者は石川潔である。後期は1944年1月から1945年5月までで、新京中央通四三号にある満洲国通信社によって出版され、山田清三郎は編集者で、芸文の編集部は新京永楽町四4-1丁目の満洲芸文連盟院で置かれた。「芸文」は42期刊行し、1945年5月に停刊した。今までに残されているのは37期分である。

1942年1月に創刊された「芸文」の付録——「原稿募集」の中には、「本誌は満洲国の芸文に一般文化推進のために、国家意欲の必然的要請に応じて生れた。本誌はこの高い理想顕現せんがために諸君の机上に送られると共に又諸君のために開放されねばならぬ。満洲国の明日の文学は本誌を土壇として発芽し生長するであろう。満洲国の新しい高邁なる文化も亦本誌によって種蒔かれ花ひらくであろう。——この意味において諸君は我々の協同者であり、本誌を通して建国の理想を顕揚せんとする戦士である。」²²との、「芸文」雑誌編集部の主張が見える。第一期とほぼ同時に出版された第二期臨時増刊号——「大東亜戦争号」は戦争動員号と言える。そこから、「芸文」雑誌が大東亜戦争を重視したことがうかがえる。1944年1月に発行された後期の「芸文」創刊号には、署名のない創刊メッセージが載せられ、「政府の特別な配慮により」本誌が刊行になったと記し、「芸文報国」²³に徹すると表明した。山田清三郎もその「芸文」創刊号に「決戦時局に即応する芸文推進の方向」という文章を発表し、「職場人でもある『満洲』の芸文家が、時局に即応できる働きをするための提案を示し、芸文家には『お召しにあずかっている』という心持を忘れるな」と唱えた²⁴。同年2月に発行された第二期の「芸文」には、関東軍宣伝部長——長谷川宇一の1943年12月に開かれた「全国決戦芸文大会」における講演——「戦争と文学」が載せられた。その講演の主旨は「戦時における芸文家の積極的役割を求める」のである。同期の「芸文」には、中川一夫の「決戦と作品価値の基準について」という文章も載せられた。その文章は「決戦こそ時代精神を強烈に性格づける唯一最高の物、作家はいかに国家の要請に応えるか」と唱えるのである。同期戦争短歌を奨励、「蒼空」同人の30余首をあげる。

前期と後期の「芸文」の発刊主旨から見れば、太平洋戦争の発展につれて、「芸文」雑誌が大東亜戦争のために奉仕する目的がさらに明確になることが分かる。「芸文」雑誌の誕生は、戦時下の関東軍と弘報処の意図と満洲文化への構想が反映されている。権力に左右されたこの雑誌はすでに「満洲浪漫」派の自由主義の性格を少しも持っていなかった。

「芸文」雑誌は、存在した時間にしても、雑誌の内容にしても、「満洲国」時代における高レベルの雑誌と言える。この雑誌の執筆者は多くて、「満洲国」時代の各流派と文学

22 芸文社「文学賞」規定・原稿募集、『芸文』第1期第1回(満洲芸文聯盟, 1943), p.3.

23 『芸文』第1巻(満洲芸文聯盟, 1944), p.3.

24 『芸文』第1巻(満洲芸文聯盟, 1944), p.8.

団体のすべての成員がそこに文章を発表したと言っても過言ではない。中でも、影響力のもっとも強い人は満洲文芸家協会委員長の山田清三郎と言えるだろう。

山田清三郎は1939年の春、黒竜江省国境地帯の永安屯と哈達河にある開拓村へきて、そこで最初の「満州」での歳月を迎えた。その間に、鏡泊学園や夏龍鎮やハルビン等での日本義勇隊訓練所の生活を体験している。「新しい開拓文化を建設し、それを以って原住民から尊敬と信頼を取り付け、彼らの間に八紘一宇の偉大な精神を広める」、それこそ「義勇隊を編成する根本である」²⁵と、山田清三郎は唱えた。

1940年12月、山田清三郎は「満洲日々新聞社」の学芸部長に昇進した。その後、山田清三郎は五年間で相次いで9冊の作品集を出版した。その半分以上は「芸文」雑誌に連載されたものである。例えば、「満洲文化建設論」は山田が「満洲」に住んだ4年間の文化評論のまとめとして、評論文を55篇収録した。山田は「満洲文化が揺ぎ無い民族協和に基づいてはじめて確立できる」、「満洲国を愛する心を以って」、「満洲国の文化の昂揚と発展」のために、文学創作をやるべきと主張し、「建国精神を基礎として」、「満洲国文化建設の綱領」を制定し、「文化中央機関」を樹立し、「満洲国」の文化政策の制定を手中に収めるべきと唱えた²⁶。

1941年12月30日、1942年9月21日、1943年7月17日、日本関東軍憲兵本部が満洲に居住した左翼日本人を検挙した事件は「北満合作社事件」と「満鉄調査部事件」と名づけられた。優れた作家である大上末広、佐藤大四郎、佐藤晴生、守随一などは獄死で、野川隆は懲役八年と判決され、病気で牢屋から病院へ移って治療を受けたが、入院二月後病院で死んだ。日本関東軍による左翼への弾圧は「大東亜聖戦」の間に行われ、日本の支配者は誠実な日本人を迫害し、国家を滅ぼし、また日本の「満洲文学」を破壊した。

太平洋戦争の後期に至ると、物資及び紙が非常に乏しくなって、「満洲」全土においては、ただ二種類の文学雑誌しか残っていなかった。一つは日本語版の「芸文」、もう一つは、中国語版の「芸文志」、二者は満洲文芸家協会の機関誌である。1945年5月は、ヒトラーナチス政権が崩壊して、同月、「芸文」も停刊し、「満洲」の日本文学雑誌も終結の運命を迎えた。

七、「満鉄」の「文装的武備」の担い手——図書館の機関誌

1906年、日露戦争が終わったあと、国策会社の「南満洲鉄道株式会社」(以下は「満鉄」と略す)が創立された。「満鉄」の規模の拡大に応じて職員の人数も急速に増え、それとともに、「満洲」に渡った日本人移民も増加してきた。このような背景の下で、「満鉄」によって、中国東北部で図書館が相次いで設立されてきた。「満鉄」が運営したこれらの図書館によって、数多くの雑誌が刊行されていた。これらの雑誌は「満洲国」時代の文壇と

²⁵ 山田清三郎『私の開拓地手記』(東京春陽堂書店, 1942), p.3.

²⁶ 山田清三郎『満洲文化建設論』(芸文書房, 1944), p.4.

文化の発展を推し進める力になってきた。今日に続く「満州国」時代の文化についての研究の基盤ともなった。

「満鉄」の「文装的武備」の担い手として設立された「満鉄」図書館は、鉄道沿線の日本職員の文化生活を充実させ、国家に対する忠誠心を持つ国民を育成するために、沿線の附属地において、31ヵ所の図書館(分館)が設立されていた。これらの図書館(分館)では大量の機関誌と定期刊行物が相次いで創刊された。例えば、1935年5月創刊された「北窓」(ハルビン図書館)、1936年1月創刊された「沙河口図書館報」(大連沙河口図書館機関誌)がその後の「満州読書新報」(後「図書館新報」と名を変えた)の誕生を促した。他には、「書香」(大連図書館)、「撫順図書館報」(撫順図書館)、「取書月報」(奉天図書館)、「新京図書館月報」(新京図書館)、なども挙げられる。これらの図書館で刊行された雑誌は、現実に基づいて作られた小説、詩歌、書評などの作品を発表する重要な場所になった。このように、「満鉄」図書館は「満州国」時代の文芸界において重要な位置をしめており、「思想の輿論を生産する」場として重大な役割を果たしていた。

「満鉄」図書館は一般的な図書館の機能を果たすと同時に、関東軍と日本大使館に研究成果と情報を提供する特別な任務を担っていた。その任務を完遂するために、「満鉄」図書館と調査部は日本国内から研究者を招聘して、中国東北部の政治、軍事、文化、民俗、資源にわたって詳しく研究と調査を行い、膨大な調査報告書を残した。これらの調査報告書は「満州国」時代の社会状態の研究を進めるための史料になっている。

「満鉄」図書館は機関誌などを刊行し、植民主義政権による植民地支配の正当性を主張すると同時に、数多くの日本文学者と歴史研究者を育成し、日本文学と歴史の研究を促進した。

「満鉄」図書館は植民主義政権のプロパガンダ政策の一環として、数十年間活動しており、戦後になって、歴史の遺跡として次第に人々の視野から離れてきたが、その文化的意義を追求する必要がある。言い換えれば、歴史の視点から、植民主義政権によって支えられた「満鉄」図書館を研究することは、歴史的、現実的意味があると思われる。

上述した大連・瀋陽・長春とハルビンの五つの大都市にある満鉄図書館は、業務内容が少し違う。大連・瀋陽・長春の図書館の機関誌には、文芸作品と文学評論が掲載されるが、図書館の業務内容を論じる文章が四分の三を占める。それと比べれば、ハルビンの満鉄図書館の機関誌である「北窓」は図書館に付属した文芸雑誌の特性をより鮮明に示し、「満洲」における日本語雑誌の発展史において重要な地位を占めている。当時、「満洲文壇」で活躍した藤山一雄・木崎隆・三宅豊子・田口稔・竹内正一・大滝重直・大内隆雄・島木健作・吉野治夫・浅見淵・谷口賢一郎・青木実・山田清三郎・菅忠行などの有名な作家が、よく投稿していた。

「北窓」は満鉄ハルビン図書館の機関誌として、1935年5月に創刊された隔月刊である。編集長を重ねた館長の竹内正一は、図書館の資金を使って、総合雑誌を出版しようとした。毎号の発行部数は確認できないが、ハルビン市内の本屋と満洲書籍配給株式会社の紹介を通して発売したりしていた。この雑誌は表紙のデザインが豪華で、学術の雰

困気が漂っているので、「満洲」の図書雑誌界において目立ち、売れ行きもよかった。

「北窓」は創刊してから、「満洲」の歴史文化・風俗・教育・文学・芸術などの分野の文章を掲載していた。「北窓」は文字通り「北に向けて開けた窓」、「編集者がシベリア・満州・モンゴルなどの北部地域の文化に関心をもつ」ことを表している。たとえば、戦時体制の確立とともに、第五巻から、北からの脅威に対応するという理由で、日露中三国の政治・軍事闘争の歴史を紹介するという内容が明らかに増えてきた。1944年3月25日出版された第五巻第五・六合併号には、「北方文献懇談会」という特集があり、この懇談会の出席者のリストには、ハルビン特務機関長・露西亜通である土居明夫の「土井」という偽名が入っている²⁷。ノモンハン事件の後、露蒙国境に強い警戒心を持った関東軍はハルビン図書館の前身である東支鉄道中央図書館が収集した図書と資料及び図書館の専門家を利用して、対ソ情報戦を行っている。このような背景の下で、「北窓」は異様な色が付いてきた。また、植民地当局の検査に応じるために、編集者は工夫を凝らして、掲載する文章の文字を添削した。

「満洲文壇」においては、大連で誕生した「作文」と「新京」で発刊した「満洲浪漫」と同じように、「北窓」はハルビン乃至「満洲全土」の新人作家とベテラン作家のために創作の舞台を提供した。編集長の竹内正一は「満洲」で有名な作家として、自分の作風と創作の道を切り開いた。1920年代から日本移民文学が盛んだった大連で生活して、30年代後半から「満鉄ハルビン図書館」に転職した。竹内正一の指導の下で、「北窓」には小説・詩歌・評論・紀行・時評など文藝関連の記事が掲載されている。この傾向は、時局の発展とともに、著しくなってきた。1940年代前後、中国東北部に対する支配と対ソ戦備体制を強化するために、関東軍は合計30万人近くの日本人を移住させていた。1942年12月30日に発行された「北窓」第四巻第六号の「開拓地特集」に22の文章が載せられている。執筆者はそれぞれの角度から、違う題材と手法で眼に映った開拓生活を描いた。ここから、戦時体制の下で国策に順応する文学の特性が見いだされる。

無視できないのは、「北窓」が発行していた10年間、数多くの作家がこれを舞台にして文壇にデビューしたことである。ここで言及すべきなのは、浜江省合作社運動に同情の念を抱いた作品が多く掲載されたことである。例えば、上述した有名な詩人である野川隆が、「北満合作社」で勤務していた時、彼の作品『九篇詩集』の中で「満州現住農民に対して深い愛を表現した」というのが罪状の一つとなり、1941年に「合作社事件」に巻き込まれて、関東軍に逮捕されて、残酷な政治圧迫で命を落とした。同じ雑誌の執筆者である埴政盈・斉藤慎一・清山健一・清水平八郎なども迫害された。これも1944年年頭「北窓」が停刊になった理由である。上述した事件は、植民地支配層の一員として独立した思想を持つ文学者が、同胞に迫害される運命の側面である。満州文芸家協会委員長山田清三郎はこの事件について「満州における原住農民への愛情の傾倒がみられた、「民族協和」と「王道楽土」の国において、それがいけないとあつては、なにをかいはいやだつた。

²⁷ 西原和海『北窓』別冊解題・総目次・索引(緑蔭書房, 1995), p.3.

私は長嘆大息した」と述べた。

地縁政治の影響で、この雑誌はロシア文化に傾倒し、また悠久の歴史を持つ西欧文化にも憧れている。現代主義的な異国風味と独特な国際主義的都市文化が交じり合う叙情曲のような自由主義の色彩、白系ロシア人に対する関心・中国の庶民に対する無関心、これらの特色を持って、植民主義支配の下での言説空間では特殊な位置を占めているといえる。

八、結び

大内隆雄は『満洲文学二十年』において「1905年の日露戦争から数えれば、満洲の植民史が四分の一の世紀を超えた」²⁸と述べる。これは歴史の事実でもあり、支配民族の一員としての本音でもある。

大連に定住した日本人は1910年の61,934人から1929年の203,002人にまで増え、大連から長春市の満鉄付属地に移住した日本人は32,496人から127,529人に達した。「満洲」に移住した日本人の総数は1923年の342,038人から1930年の810,000人に増えてきた²⁹。日本人移民の密度は北であるほど減少してきた。「満洲」の日本文学は大連で発祥し、瀋陽・長春・ハルビンなどの鉄道沿線の大都市へと拡張した。早期には、大連で文学活動をした日本人の多くは「満鉄」の職員と自由主義者で、「満洲」が日本に資源を輸出し、経済を支えるための「大陸」になることを望み、日本文学で「満洲」進出の虚妄的心理を記録しようとした。兼業作家として、短い川柳・俳句・漢詩などのジャンルの創作に力をいれていた。これは大連の移民の生活状態と職業とかかわりがある。「満洲開拓」の事業と比べれば、歌作は暇つぶしと早期の移民の懐かしい思い出を記録するものに過ぎない。

「九一八」事変の後、日本軍国主義の戦略の転換とともに、「新京」は軍事・政治・経済の中心地になるとともに、日本植民主義政権の「大東亜戦争」の世論の中心地にもなった。「満洲」に渡った有名な日本人作家によって、「新京」では急速に数多くの日本語文学雑誌が刊行されてきた。これらの雑誌に掲載されたなかには、芸術性のある高いレベルの作品があるが、戦争協力・国策順応の多層の使命を持ち、敗戦とともに歴史の舞台から消えてしまった。これらの作品は植民主義の「宗主国」の文化属性を現し、現代人に考えさせる空間を残した。

28 大内隆雄『満洲文学二十年』(国民画報社, 1944), p.18.

29 大形孝平『日本の満洲開拓』(満洲文化協会, 1932), p.3.

参考文献

- 平献民(1994.4)「日本作家筆下の東北亜」(『日本研究』第4号).
- 李相哲(2000)『満州における日本人経営新聞の歴史』凱風社.
- 蛭原八郎(1980)『海外邦字新聞雑誌史』東京：名著普及会.
- 大形孝平(1932)『日本の満洲開発』満洲文化協会.
- 真鍋五郎(1941)『満洲都市案内』垂細亜出版協会.
- 葉山英之(2011)『満洲文学論『断章』』三交社.
- 大内隆雄(1944)『満洲文学二十年』国民画報社.
- 劉玉璋(1942.2)「日本雑誌与満洲雑誌」(『書光』第2号).
- 星野龍男(1935)『満洲主要都市工商便覧』大連南鉄道株式会社地方部商業課.
(1939)『新京案内』.
- 真鍋五郎(1941)『満洲都市案内』垂細亜出版協会.
(1933)『第一満洲国年報』満洲文化協会).
- 岡田英樹(2007)『文学にみる『満洲国』の位相』研文出版社.
- 日本報国文学会(1943)『昭和年鑑十八年文藝』桃溪書房.
(1943)「芸文社「文学賞」規定・原稿募集」(『芸文』第1期第1回, 満洲芸文聯盟).
(1944)『芸文』第1巻, 満洲芸文聯盟).
- 山田清三郎(1942)『私の開拓地手記』東京：春陽堂書店.
- 山田清三郎(1944)『満洲文化建設論』芸文書房.
- 西原和海(1995)『「北窓」別冊解題・総目次・索引』緑蔭書房.

劉春英 Chunying LIU

(中国)東北師範大学日本問題研究所。准教授。日本近代文学、植民地文学など。「新京時代の日本作家」(『偽満歴史文化与現代中日関係』北京：商務印書館, 2013)、『日本女性文学史』(北京：商務印書館, 2012)、「만주시대에 있어 신징(新京)의 일본인 작가」(『제국 일본의 이동과 동아시아 식민지문학1』서울：도서출판 문, 2011)、『中国現代文学史における二回の翻訳ピークと芥川龍之介』(『日本研究』京都：国際日本文化研究センター, 第34号, 2007)。